



©中藤毅彦
シリーズ「Sakuan, Matapaan-Hokkaido」より

何かを問う作品を発表している。
特別作家賞、中藤毅彦氏
 1970(昭和45)年、東京生まれ。早稲田大学第一文学部中退。東京ビジュアルアーツ写真学科卒業。
 2000(平成12)年から代官山に自主運営ギャラリー・ニエプスを開き、多数の個展を開催する(後に四谷三丁目に移転)。
 都市のスナップショットを中心に、ざらついたモノクロームの質感にこだわった作品を発表し続けている。1995(平成7)年、展覧会「NIGHT CRAWLER―虚構の都市への彷徨」(コニカプラザ)で、生まれ育った東京の写真を発表して以降、東欧の旧共産主義国の諸都市を撮影。ベルリン、ワルシャワ、プラハ、ブダペスト等で

撮られた写真を収めた写真集「Winterlicht」(ワイズ出版、2001年)を出版。
 その後もキューバ、ニューヨーク、上海、ロシアなど世界各地で撮影を行う。
 2009(同21)年、東欧、ロシアと北海道をつなぐ土地・サハリンを撮影した写真で展覧会「CAXA HAH―サハリン」(コニカミノルタプラザ)を開催。
 今年は北海道の写真をまとめた展覧会「Sakuan, Matapaan ― Hokkaido」(禅フォトギャラリー)を開催。
 Sakuan, Matapaanはアイヌ語で「夏が来る、冬が来る」を意味する。洗練されたストリートスナップの手法によって撮り収められた人物、風景は、独自の世界像を提示している。

初期のころから一貫して用いられていた正方形のフォーマットの写真から、最近では4×5寸の大型カメラを使った作品や映像も発表するなど、新たな展開をみせている。
 写真集、展覧会、ブログ日記など多方面による精力的な活動を続けるほか、国内外での発表も多数。
新人作家賞、初沢亜利氏
 1973(昭和48)年、フランス・パリ生まれ。上智大学文学部社会学科卒業。細江英公主催の第13期写真ワークショップ・コルプス修了。
 イノハ尾スタジオを経て、フリーランス写真家として活動。ファッショ

ン、グラフィア、クルマ、宝塚歌劇などの撮影を手がける一方、作品制作も精力的に行う。
 2003(平成15)年2月にイラク戦争開戦直前のバグダッドを訪問、開戦後の6月にも再訪し、戦争の影に隠れて見失われがちな日常の断片を伝える写真集「Baghdad 2003」(碧天舎、2003年)を発表。
 2009(同21)年秋、写真集制作のため北朝鮮への入国を申請。2011(同23)年から翌年にかけて4度訪朝し、メディアにはほとんど紹介されることのない都市や地方の住民の生き生きとした姿を隠し撮りなしでとらえた写真集「隣人。38度線の北」(徳間書店、2012年)を出版。
 北朝鮮での撮影と並行し、東日本大震災翌日の3月12日から被災地での撮影を始める。翌12年までの1年間、毎月のように被災地に通いながら、「被災者」といった視点からこぼれ出る人々の生活に向き合おうとした写真集「True Feelings―爪痕の真情」2011.3.12~2012.3.11」(三栄書房、2012年)を出版。
 マスメディアによって構築されたイメージではないものを自らの体験を通して得た「確かさ」によってすくいあげることを試みつつ、「自明性」とは

飛弾野数右衛門賞、山田實氏
 1918(大正7)年生まれ、沖縄県那覇市出身。41年明治大学専門部商科卒業。
 大学新聞編集委員を務め、同年同大新聞高等研究科(二部)卒業。日産土木株式会社入社後、満州に赴任。現地で召集を受けた。終戦後シベリア抑留。47(昭和22)年舞鶴に復員。
 日産土木に復職後、52(同27)年沖縄へ帰還。那覇市内に山田写真機店を開業。二科会沖縄支部結成メンバー(58年)となる。沖縄ニッコールクラブを設立(59年)、沖展への会員参加(62年)、沖縄写真連盟設立メンバー(66年)など、戦後沖縄写真界の草分け的存在。
 土門拳のリアリズム運動や、62(昭和37)年に沖縄での取材に同行した濱谷浩から強い影響を受ける一方、基地や闘争の写真からは距離を置き、子どもや庶民の日常生活を、抑制のきいた距離感と深い共感によって撮りおさめる。
 72(同47)年の本土復帰までは、岩宮武二、濱谷浩、林忠彦、木村伊兵衛、東松照明ほか、本土の多数の写真家の身元引き受け人となった。
 その後東松氏が主となって沖縄で開催した「ワークショップ写真学校」の



©山田實
靴磨きの少年 那覇市国際通り1956年

国内作家賞、川内倫子氏
 1972(昭和47)年、滋賀県生まれ。93(平成5)年、成安女子短期大学卒業。97(同9)年に第9回ひとつぼ展グランプリ受賞。
 2002(同14)年、初めて出版した写真集「うたたね」「花火」(リトルモア)によって第27回木村伊兵衛賞受賞。

2005(同17)年、パリ・カルティエ現代美術財団で個展開催。2009(同21)年、第25回ICPインフィニティ・アワード芸術部門受賞。2012(同24)年開催された個展「照度 あめつち 影を見る」(東京都写真美術館)で芸術選奨新人賞受賞。13年間撮りためた家族写真を収めた「Cui Cui」(フォイル、2005年)や、サンパウロ近代美術館との共同プロジェクトで日系移民100周年を記念してブラジルで撮り下ろした写真集「時を待つ/Semear」(フォイル、2007年)など、私的な日常や自然の風景を、独自の視線と光の下で切り取った作品は、相互の巧みな構成によって、生と死、光と闇、天と地といった普遍的な要素を浮き上がらせている。

イデンティティーを探究することによって、そこに新たな意味を創出することを目指している。
 主なプロジェクトに、地域を取り巻くコンテキストと、それが家族構造に及ぼす影響を読み解く「Merity, Merity, Merity, Merity」シリーズなど。



©川内倫子
無題(シリーズ「Illuminance」より)2007年

写真集「隣人。38度線の北」(徳間書店、2012年)を出版。
 北朝鮮での撮影と並行し、東日本大震災翌日の3月12日から被災地での撮影を始める。翌12年までの1年間、毎月のように被災地に通いながら、「被災者」といった視点からこぼれ出る人々の生活に向き合おうとした写真集「True Feelings―爪痕の真情」2011.3.12~2012.3.11」(三栄書房、2012年)を出版。
 マスメディアによって構築されたイメージではないものを自らの体験を通して得た「確かさ」によってすくいあげることを試みつつ、「自明性」とは

©初沢亜利
平壤2012年